

# 『日はまた昇る』におけるブレット・アシュリーの孤独

森兼寛登

## 序

アーネスト・ヘミングウェイ(Ernest Hemingway)の代表的長編『日はまた昇る』(*The Sun Also Rises*)の批評史において、ヒロインであるブレット・アシュリー(Lady Brett Ashley)は批評家の関心を集め、論争の的となってきた。これまで多くの批評家はブレットを性的に軽薄な女性として“bitch”という言葉を使って形容してきた<sup>1</sup>。また、ウェンディー・マーティン(Wendy Martin)はブレットを“patriarchal marriage”(68)を拒み、“the role of the ethereal other”(68)の範疇に収まることを拒絶する“New Woman”であると定義している。一見すると異なって見えるこの2つの解釈はブレットを一般的なジェンダー・ロールに収まりきらないような「強い女性」として見ている点で軌を一にする。確かにブレットは「男勝り」な言動によって1人異彩を放っている。しかしながら、この“bitch”や“New Woman”という観点だけではブレットを的確に評価することはできない。どちらの解釈もブレットの重要な要素であることは間違いないけれども、ブレットはそれらの要素だけでは回収できないような人物としての深さを有している。

このことを考えるにあたってブレットが34歳であり、『日はまた昇る』の舞台が第一次世界大戦後に設定されていることは重要である。ミミ・レイゼル・グラッドスタイン(Mimi Reisel Gladstein)が“[Brett’s] indestructible qualities are revealed as we become aware of her past”(61)と指摘するように、ブレットを評価するときに考慮すべき事情として彼女の「過去」がある。ブレットはかつて愛した恋人を赤痢で失っている。加えて、のちに結婚したアシュリー卿という貴族は戦争の後遺症からか、ブレットを殺すと脅し、寝るときには回転式拳銃を肌身離さず持つような人物であったため、ブレットはひそかに弾を抜いていたという。このようなトラウマ的ともいえる「過

---

<sup>1</sup> 詳しくはロリー・ウォトキンズ・フルトン(Lorie Watkins Fulton)、pp. 61-62を参照のこと。

去」は、それを乗り越えるためにブレットが身に着けざるを得なかった「強さ」を前景化する。しかし、ブレットが「強く」あろうとしても小説内においてそれは容易なことではない。ブレットがアシュリー卿と結婚した時に手に入れた“lady”という爵位を“damned useful sometimes” (47)<sup>2</sup> という理由だけで使い続けていることは示唆的である。このことは、作中において、女性が1人で生きていく難しさを象徴するように思われる。己の「過去」を乗り越えようとブレットは「強く」あろうとするのだが、それが困難であるという現実、ブレットと彼女を取り巻く男たちの関係において表出されている。本稿はブレットが物語の終局を迎えても、男たちと満ち足りた関係を構築することができないことに注目し、作品をブレットの「孤独」に焦点を当てて論じる。

## I

ブレットの作中における位置に関してハロルド・ブルーム (Harold Bloom) は “Whose novel is it anyway? Take Brett out of it, and vitality would depart” (2) と評している。小説の中心的位置にあって、見る者全ての視線をくぎ付けにする美貌の持ち主であるブレットは、複数の男 (語り手兼主人公であるジェイク・バーンズ、ユダヤ人小説家のロバート・コーン、ミヒポポラス伯爵、近々ブレットと結婚する予定であるマイク・キャンベル、そして19歳のスペイン人闘牛士であるペドロ・ロメロ) とそれぞれ時間を過ごす。そのようなブレットのことをコーンが陰で “Circe” (115) と蔑称していることがマイクによって明かされる。人を獣に変える力を持つ魔女キルケ<sup>3</sup>に例えられるブレットの外面的な部分だけを取り出して “bitch” と呼ぶのは容易い。だが、より注目すべきは、以下で見るように、ブレットの人物造形が決して単純ではなく、登場人物としての奥行きが与えられていることだ。

---

<sup>2</sup> 以下、作品からの引用は The Hemingway Library Edition による。

<sup>3</sup> キルケが伝統的に男の「去勢不安」と結び付けられていることは重要である。ブラム・ダイクストラ (Bram Dijkstra) はブレットを “an unconscious vampire woman” (373) であり “a phallic woman” (376) であるとさえ述べる。

確かにブレットは相手の男を次々と替え、また、いくぶん自己中心的な振る舞いも数多く見受けられる。とはいえ少なくともブレットは自らの行いに対して自覚的である。例えば、ブレットがコーンとサン・セバスチャンで夜を過ごした後にジェイクと彼の友人であるビル・ゴートンと会った際、“Must clean myself” (61)、“Must bathe” (61) と口にするところからもそれは確認される。シャワーを浴びることによって自らの行いを清めようとしているのである。また、34歳の自分が19歳のロメロに恋をしている状態を指して“I’m a goner” (146) とジェイクに述べる。このことからブレットは自身に倫理観が欠落していることを自覚しており、彼女の振る舞いは単に盲目的な訳ではないことが分かる。一見すると相反するように見えるブレットの振る舞いと彼女の自意識とのずれが間接的に示唆されるのは、ジェイクがブレットと2人でタクシーの後部座席に乗っている場面においてである。そこでジェイクはブレットの「目」を以下のように叙述する。

She was looking into my eyes with that way she had of looking that made you wonder whether she really saw out of her own eyes. They would look on and on after every one else’s eyes in the world would have stopped looking. She looked as though there were nothing on earth she would not look at like that, and really she was afraid of so many things. . . . She had been looking into my eyes all the time. Her eyes had different depths, sometimes they seemed perfectly flat. Now you could see all the way into them. (22)

自らを深く見つめるブレットの目には何かジェイクを引き付ける力があるようである。この一節で特に注目すべきは、“Her eyes had different depth, sometimes they seemed perfectly flat. Now you could see all the way into them” という言葉である。ジェイクによればブレットの目は違った深さを持ち、時によって目の奥まで見通せたり、見通せなかつたりするという。この「違う深さの目」は“eyes” と“I”の音の呼応も相まってブレットが持つ二重性にも関係している<sup>4</sup>。時によって深さを変えるブレットの目は、彼女

---

<sup>4</sup> リンダ・バターソン・ミラー (Linda Patterson Miller) はブレットの目が “the

の軽薄な行動といった表層的な部分と、自意識といった深層にある部分を峻別するよう読者に迫る。ブレットを正確に読むためには彼女の表層的な部分だけを掬い取るだけでは不十分なのである。

## II

ブレットの「孤独」を見ていくにあたって示唆的なのは作中のアルコール表象である。ブレットを含む登場人物の多くが酒を飲んでいるが、それは「嗜む」程度のものではなく、ほぼアルコール依存症といって良い。その中でもブレットの酒豪ぶりは抜きんでており、ジェイクの目から見てもブレットは“a drunk” (31) である。ブレットのアルコールの問題に関してはこれまでカーロス・ベーカー (Carlos Baker) の “alcoholic nymphomaniac” (91) という表現、マッツ・G・ジョス (Matts G. Djos) による “Brett personifies the generic female alcoholic with a remarkable prejudice for manipulation and orchestration” (17) との説明、ジョン・W・クローリー (John W. Crowley) による “As an alcoholic, Brett lacks a proper sense of values. . . . Brett is addicted to alcohol and to sexual excitement” (56) との評価がなされてきた。しかし、前節でみた表層と深層の区別を読み手に迫るようなブレットの人物造形を考慮に入れるならば、三者の評言ともブレットの表層的な部分だけを切り取ったものであるといえるだろう。なぜブレットが酒のことを “poisonous things” (115) と呼んでいるにもかかわらず、酒を飲み続けているかということを考えていないからだ。といっても、クローリーの (酒を飲む行為を「男性的」と措定したうえで) ブレットが “a sexually ambiguous Circe who leads men spellbound to their doom by means of an androgynous allure” (57) であるとの指摘は看過すべきではない。ブレットが「男のように」酒を飲み、「両性具有」的な魅力で男を虜にすることは、なぜブレットがそのようなジェンダー越境的な振る舞いをするのか、あるいは、せざるを得ないのかという問題を提起する。

ここで我々は序論において確認したブレットの「過去」を想起するべきだろう。ブレットの「過去」とアルコールを繋げる補助線として、ブレットが宗教ないし神を信じられないということを確認しておきたい。ブレットがスペインにてジェイクと共に教会に入った時の様子は以下のように描かれる。

---

windows of her soul” (174) になっていると指摘している。

Many people were praying. You saw them as your eyes adjusted themselves to the half-light. We knelt at one of the long wooden benches. After a little I felt Brett stiffen beside me, and saw she was looking straight ahead.

“Come on,” she whispered throatily. “Let’s get out of here. Makes me damned nervous.” (166)

教会の中ではブレットの体はこわばってしまい、緊張してしまう。教会から出た後にブレットは “I’ve never gotten anything I prayed for” (167) と宗教は自分が何かを祈ってもそれに応えてくれなかったことをジェイクに語る。この場面において示唆されるブレットと宗教の関係を踏まえると、ブレットにとってアルコールが宗教に代わる救済の手段として立ち現れてきたとしても不思議ではない。ブレットにとって酒を消費することは自身の傷を癒す手段となっていると考えられる。過去に負った心の傷の痛みをいわば中和させるために、「男のように」酒を飲み続けるしかないのである。しかし、もちろんというべきか、その酒には副作用としての依存作用がある。ブレットはジェイクに「酔わないこと」を繰り返し乞う。

“Don’t get drunk, Jake,” she said. “You don’t have to.”

“How do you know?”

“Don’t,” she said. “You’ll be all right.”

“I’m not getting drunk,” I said. “I’m drinking a little wine. I like to drink wine.”

“Don’t get drunk,” she said. “Jake, don’t get drunk.” (198)

これは酒に溺れたブレットがジェイクには正常であってほしい気持ちの表れである。ブレットは自分が酒に頼らざるを得ない状況になっていることを自覚しているし、尚且つ、自分がそこから抜け出せないことをも知り尽くしているのである(故にブレットはジェイクに “Don’t try and make me drunk” (26) という)。また、ヘミングウェイはブレットがアルコールへの耽溺から抜け出せないのは、アルコールがブレット個人としての問題だけで

はなく、彼女と彼女を取り巻く社会との関係性の問題でもあることを示唆している。例えば、ブレットの髪は “her hair was brushed back like a boy’s” (18) と男子のように短いのだが、ジェイク達がスペインのワインショップの前を通る場面においてブレットは店の女たちから “The woman standing in the door of the wine-shop looked at us as we passed. She called to some one in the house and three girls came to the window and stared. They were staring at Brett” (110) と視線を向けられる。これはおそらく、(単に美しいということもあるが) スペインにおいて伝統的に女性に求められるような長い髪ではなく、短く切ったブレットの髪といった彼女の外見によるものである。しかし、ブレットはジェイクに “I don’t want staring at just now” (166) と客体として見られることへの不安／不満を口にしている。「強く」あろうとするブレットは伝統的社会からみて常に異端者扱いされてしまう。そのようなブレットにとってアルコールとは自らの過去の精神的な傷を癒す手段であったのだが、それだけでなく、自らを取り巻く社会に対しての不安や不満を(一時的にせよ)麻痺させるものなのである<sup>5</sup>。アルコールが果たすことを期待されるこの 2 つの役割を念頭に置き、次節ではブレットの「孤独」の諸相を見ていきたい。

### III

男たちはそれぞれ様々な理由でブレットとの仲がもたない。まず、ジェイクは戦争によって受けた性器の傷が原因でブレットと肉体関係を持つことができない。ブレットもジェイクに対しては同じく「傷」を持つ者として特別な感情を抱いているものの、“I’d just tromper you with everybody” (45, emphasis in original) と自分が浮気してしまうゆえに共に生活することができないとジェイクに告げる。コーンはブレットと夜を共にしたことで舞い上がってしまい、ブレットへの思いは “affair with a lady of title” (142) と

---

<sup>5</sup> デブラ・A・モデルモグ (Debra A. Modellmog) は “Brett’s alcoholism and inability to sustain a relationship might be indications not of nymphomania, with which the critics have often charged her, but of a dissatisfaction with the structures of male-female relationship” (95) とブレットのアルコール依存症が男女間の(ジェンダー)関係構造への「不満」の表れであると指摘している。

爵位を持つ貴婦人との色恋に過ぎない。ブレットの次の結婚相手であるマイクは家が大金持ちだが “an undischarged bankrupt” (65) であり “a tremendous bankrupt” (153) である。マイクの金銭的な「破産」は彼のモラルの問題でもあるために、ブレットとの結婚生活も長続きしないだろうことが予感される。ロメロはブレットに対してスペインの伝統的な女性性の象徴である長い髪を要求し、“Me, with long hair. I’d look so like hell” (194) と彼女からそれを拒否される。ブレットは誰とも(それぞれ別の理由で)深い関係になることができない。故に次々と相手を替えていくのだが、最終に関係を持ったロメロとも別れ、結局はジェイクのもとに戻ってくる。誰にも所有されないという意味ではブレットは自由であるといえるが、それは同時に誰とも持続的な関係構築に至らないブレットの「孤独」を指し示す。

そのような男たちの中でも独特の位置を占めているのがミピポポラス伯爵である。登場人物たちの中では描かれている場面は比較的少ないにせよ、ブレットを理解するうえで重要な人物であることは間違いない。ミピポポラス伯爵は高齢ということもあり、他の男たちとは少し事情が異なるにせよ、ブレットを取り巻く男の1人であることに変わりはない。先ほどブレットの「目」について述べたが、語り手であるジェイクは伯爵がブレットのことを “The count was looking at Brett across the table under the gas-light” (47) や “He lit the cigar, puffed at it, looking across the table at Brett” (47) とテーブル越しに見ている様子を叙述している。また、伯爵は “I enjoy to watch you dance” (52) とブレットが踊る姿をただ眺めて楽しんでいる。ここで重要であるのは伯爵がブレットをいかに見ているか(もしくは見ていないか)である。伯爵にとってブレットは見て楽しむものなのであって、ブレットを眺めることはあっても、真に彼女の「目」を見つめることはないのである。ブレットも彼を見ることはなく、両者の視線が交わることはない。

少し後になってミピポポラス伯爵が「傷」を負っていることが明らかにされる。伯爵はその傷を負った経緯を次のように語る。

“I have been in seven wars and four revolutions,” the count said.

“Soldiering?” Brett asked.

“Sometimes, my dear. And I have got arrow wounds. Have you

ever seen arrow wounds?

“Let’s have a look at them.”

The count stood up, unbuttoned his vest, and opened his shirt. He pulled up the undershirt onto his chest and stood, his chest black, and big stomach muscles bulging under the light.

“You see them?”

Below the line where his ribs stopped were two raised white welts. “See on the back where they come out.” Above the small of the back were the same two scars, raised as thick as a finger.

“I say. Those are something.” (49)

ミピポポラス伯爵は7つの戦争と4つの革命を経験しており、自身の傷をブレットに見せる。伯爵は身体的傷を負っているという点でジェイクと同じ境遇にある。ロバート・E・フレミング (Robert E. Fleming) は2人が負う傷にアナロジーを見出し、ミピポポラス伯爵がジェイクを導くような “code hero” ないし “tutor” であると述べている(141)<sup>6</sup>。しかし、むしろ注目すべきは両者の傷の質の違いである。ジェイクは性器に受けた傷によって苦しんでいるが、ミピポポラス伯爵はブレットに対して、自身が21歳の時にアビシニアで受けた傷を見せ、それらをむしろ誇りにしている<sup>7</sup>。同じ傷でもジェイクのそれ(ブレットの「過去」についても当てはまる)とは異なり伯爵の傷はすでに癒えているといえる。ミピポポラス伯爵の重要性とは、伯爵と2人の違いによってこそ理解されるべきなのである<sup>8</sup>。

---

<sup>6</sup> “code hero” という語はフィリップ・ヤング(Philip Young)によって作られた。ヤングは *In Our Time* (1925)の主人公であるニック・アダムズを “Hemingway Hero” と呼び、“Hemingway Hero” の問題に解決策を提供する者が “code hero” であると定義する(63-64)。H・R・ストーンバック(H. R. Stoneback)はミピポポラス伯爵が “the role of one of the novel’s most exemplary characters” (59) を果たしていると指摘している。

<sup>7</sup> ミピポポラス伯爵の傷が「矢」によるものだということも重要である。これはジェイクが経験した第一次世界大戦がそれまでの戦争と一線を画すものであったことを示唆している。

<sup>8</sup> この点については辻秀雄の論考に詳しい。辻はミピポポラス伯爵と F・スコット・フィッツジェラルドの *The Great Gatsby* (1925)の登場人物であるジェイ・ギャツビー

ミピポポラス伯爵は無類の酒好きでもあり、お抱えのヘンリーという運転手にシャンパンを持たせている。その伯爵がジェイク、ブレットと交わす次の会話はブレットとアルコールの問題、そしてブレットの「孤独」という文脈において重要である。

“I say. You might open it,” Brett suggested.

“Yes, my dear. Now I’ll open it.”

It was amazing champagne.

“I say that is wine,” Brett held up her glass. “We ought to toast something. ‘Here’s to royalty.’”

“This wine is too good for toast-drinking, my dear. You don’t want to mix emotions up with a wine like that. You lose the taste.”

Brett’s glass was empty.

“You ought to write a book on wines, count,” I said.

“Mr. Barnes,” answered the count, “all I want out of wines is to enjoy them.”

“Let’s enjoy a little more of this,” Brett pushed her glass forward. The count poured very carefully. “There, my dear. Now you enjoy that slowly, and then you can get drunk.”

“Drunk? Drunk?”

“My dear, you are charming when you are drunk.”

“Listen to the man.”

“Mr. Barnes,” the count poured my glass full. “She is the only lady I have ever known who was as charming when she was drunk as when she was sober.” (48-49)

ブレットに促されてミピポポラス伯爵は「素晴らしい」シャンパンを開ける。ブレットがそれで祝おうとすると、伯爵によって「ワインと感情を混ぜないよ

---

との間に親近性を見出し、2人の類似点を「職業」、「出自」、「素性」、「言葉づかい」から明らかにすることによって、ミピポポラス伯爵がヤングのというような“code hero”ではないことを説得的に論じている(22-26)。

うに」窘められる。そうすることによって風味を味わえるのだという。続いて伯爵はジェイクに自分がワインに求めるものはそれを「楽しむことだけ」であると述べる。ここで繰り返される会話は一見何気なく聞こえる。しかし、ここでアルコールのモチーフがふんだんに使われていることは注目に値する。ここで提示したい 1 つの仮説は、ミピポポラス伯爵にとってワインとブレットが類似的な関係で繋がっているということである。すなわち、ブレットもミピポポラス伯爵にとって「感情を交えず」に接するような相手であり、自らを「楽しませる」ものということである<sup>9</sup>。ミピポポラス伯爵はブレットに酒を注いで酔うように仕向け、そうする理由は酒に酔ったブレットが“charming”であるからだとジェイクに述べる。だが、これまでに見てきたようなブレットが酒を飲む(飲まなければならない)理由を考えると、この発言はブレットとミピポポラス伯爵の間に親密な人間関係が構築できていないことの証左となり、また、伯爵にとってブレットは自分に楽しみを与えてくれるだけの存在に過ぎないことを示唆している。ブレットもその時に“Brett’s glass was empty”と酒を飲んでいるのだが、この場面において酒を飲む行為とは、“empty”という一語が示唆するように、伯爵が自分の人格を見ようとはしていないことに対してブレットが感じる空虚さと分かちがたく結びついているのである。

次の場面ではミピポポラス伯爵とブレットの関係性はより明確なものとなる。

“You see, Mr. Barnes, it is because I have lived very much that now I can enjoy everything so well. Don’t you find it like that?”

“Yes. Absolutely.”

“I know,” said the count. “That is the secret. You must get to know the values.”

“Doesn’t anything ever happen to your values?” Brett asked.

“No. Not any more.”

“Never fall in love?”

---

<sup>9</sup> 大金持ちである伯爵がブレットにビアリッツに一緒に行ってくれるよう 1 万ドルを渡した(ブレットを買おうとした)という事実をここで確認しておく。

“Always,” said the count. “I am always in love.”

“What does that do to your values?”

“That, too, has got a place in my values.”

“You haven’t any values. You’re dead, that’s all.”

“No, my dear. You’re not right. I’m not dead at all.” (50)

ミピポポラス伯爵は自分が「長く生きたため全てを楽しむことができる」と述べる。このような伯爵独自の「価値観」とは自分が傷つかないようにするために時間をかけて形成した1つの方法であるといえるだろう。ブレットもワインと同じように伯爵の中で一定の価値を持つが、あくまでも、伯爵の価値観を揺るがすことはない。そのような伯爵に対してブレットは“**You haven’t any values. You’re dead, that’s all**”と言いつつ。それは伯爵に対するブレットの決別の言葉である。ブレットが伯爵に「死んでいる」と言うことは自分が「生きている」ことを含意し、さらにいえば、伝統的価値が崩壊した世界において「強く」生きようとするへの決意表明とも読める。だが、その決意とは裏腹に、ブレットはミピポポラス伯爵と酒を飲んだ少し後に、“**so miserable**” (52) な状態に陥る。ブレットはミピポポラス伯爵と自分を区別し、距離を取ろうとするのだが、結果として惨めな気持ちになってしまう。「過去」を乗り越え、「強く」生きようとするブレットが否応なしに直面する現実がこの一点に集約される。ミピポポラス伯爵との何気ないやり取りとアルコールのモチーフによってブレットの「孤独」が示されるのである。

### 結語

ブレットは男たちと刹那的な関係を作るものの、常に何か満たされない思いを抱えている。その欠乏感を埋めるようにブレットは新たな男に走り、酒を飲む。だが「過去の傷」を癒し、「社会に対する不安／不満」を麻痺させるものとしてのアルコールはその役割を果たすことはない。最初に登場したときブレットはジェイクと次のような会話を交わす。

Brett came up to the bar.

“Hello, you chaps.”

“Hello, Brett,” I said. “Why aren’t you tight?”

“Never going to get tight any more. I say, give a chap a brandy and soda.” (18)

ここでブレットはジェイクからなぜ素面なのか聞かれ、もう「決して酔わないことにした」と答える。しかし、物語の最後になってもブレットはその宣言を守ることはできない。スペインのホテルのバーでの場面は以下のように描かれる。

Brett had sipped from the Martini as it stood, on the wood. Then she picked it up. Her hand was steady enough to lift it after the first sip.

“It’s good. Isn’t it a nice bar?” (196)

ブレットが物語の最初から最後まで酒を飲み続けるのは物語を通して彼女に変化が訪れない(「孤独」が解消されない)ことを示唆している。そしてそれは変化が訪れないほど「過去の傷」やブレットを取り巻く「社会」の力が大きいともいえる。しかし一方で、その「孤独」の原因は「過去」や「社会」だけに求めるべきものではない。その「過去」や「社会」に「個人」としてどのように向き合うかも等しく重要なのである。だが作中においてブレットは 1 人になることができず、常にだれかと行動している。ブレットはコーンとサン・セバスチャンへ行き、夜を共にするも、その理由はジェイクに言わせれば “she can’t go anywhere alone” (82) と 1 人ではどこにも行けないからであるという。1 人になることができず、他人に安易に頼ることによってブレットの「孤独」はますます深まってしまう。そのような「孤独」から逃れようとブレットはアルコールに頼るも、それはブレットを刹那的に高揚させ、一時的な逃避にはなっても、彼女の救済とはならない。ブレットが “I say, I have a thirst” (164, emphasis in original) という時、読者はブレットの喉の渇きが決しておさまることはないことを知るのである。

## 引用文献

- Baker, Carlos. *Hemingway: The Writer as Artist*. Princeton UP, 1952.
- Bloom, Harold. Introduction. *Brett Ashley*, edited by Harold Bloom, Chelsea House Publishers, 1991, pp. 1-3.
- Crowley, John W. *The White Logic: Alcoholism and Gender in American Modernist Fiction*. U of Massachusetts P, 1994.
- Dijkstra, Bram. *Evil Sisters: The Threat of Female Sexuality in Twentieth-Century Culture*. Henry Holt, 1998.
- Djos, Matts G. *Writing Under the Influence: Alcoholism and the Alcoholic Perception from Hemingway to Berryman*. Palgrave Macmillan, 2010.
- Fleming, Robert E. "The Importance of Count Mippipopolous: Creating the Code Hero." *Critical Essays on Ernest Hemingway's The Sun Also Rises*, edited by James Nagel, G. K. Hall, 1995, pp. 141-45.
- Fulton, Lorie Watkins. "Reading Around Jake's Narration: Brett Ashley and *The Sun Also Rises*." *The Hemingway Review*, vol. 24, no. 1, Fall 2004, pp. 61-80.
- Gladstein, Mimi Reisel. *The Indestructible Woman in Faulkner, Hemingway, and Steinbeck*. UMI Research P, 1986.
- Hemingway, Ernest. *The Sun Also Rises: The Hemingway Library Edition*, edited by Seán Hemingway, Scribner, 2014.
- Martin, Wendy. "Brett Ashley as New Woman in *The Sun Also Rises*." *New Essays on The Sun Also Rises*, edited by Linda Wagner-Martin, Cambridge UP, 1987, pp. 65-82.
- Miller, Linda Patterson. "Brett Ashley: The Beauty of It All." *Critical Essays on Ernest Hemingway's The Sun Also Rises*, edited by James Nagel, G.K. Hall, 1995, pp. 170-84.
- Moddelmog, Debra A. *Reading Desire: In Pursuit of Ernest Hemingway*. Cornell UP, 1999.
- Stoneback, H. R. *Reading Hemingway's The Sun Also Rises: Glossary and Commentary*. The Kent State UP, 2007.
- Young, Philip. *Ernest Hemingway: A Reconsideration*. The Pennsylvania State UP, 1966.
- 辻秀雄「ミピポポラス伯爵がギャツビーであるようにブレット・アシュレーはマリアである—中世主義、マリア崇拜、重層的テキスト」『ヘミ

ングウェイ研究』, 日本ヘミングウェイ協会編, 第 15 号, 2014 年  
5 月, 21-33 頁.